

平成29年度

宇都宮大学教育学部推薦入試Ⅰ（A）試験問題

小論文

教育学部学校教育教員養成課程国語分野

平成28年11月25日（金）

9時00分～10時00分

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
2. 「受験番号」は、解答用紙の受験番号欄に忘れずに記入すること。
3. この冊子には、1問題（1つの設問）がある。乱丁、落丁、印刷不鮮明の箇所があった場合には、申し出ること。
4. 解答用紙は、1枚である。解答は、必ず解答用紙の所定の解答欄に記入すること。所定の欄以外に記入したものは、無効である。

問題 次の文章は、明治三十九年（一九〇六年）十月二十六日に、夏目漱石が門下生の小説家・鈴木三重吉に出した書簡の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ただ一つ君に教訓したき事がある。これは僕から教えてもらって決して損のない事である。僕は子供のうちから青年になるまで世の中は結構なものと思っていた。うまいものが食えると思っていた。綺麗な着物がきられると思っていた。詩的に生活が出来てうつくしい細君（注）がもてて、うつくしい家庭が出来ると思っていた。

もし出来なければどうかして得たいと思っていた。換言すればこれらの反対を出来るだけ避けようとしていた。然るところ世の中にいるうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反対の現象でうずまっまっている。

そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、いやなものでも一切避けぬ、否進んでその内へ飛び込まなければ何にも出来ぬという事である。

ただきれいにうつくしく暮らす、即ち詩人的にくらすという事は生活の意義の何分一か知らぬがやはり極めて僅小な部分かと思う。で『草枕』のような主人公ではいけない。あれもいいがやはり今の世界に生存して自分のよい所を通そうとするにはどうしてもイブセン流（注）になんてはいけない。

この点からいうと単に美的な文字は昔の学者が冷評した如く閑文字（注）に帰着する。俳句趣味はこの閑文字の中に逍遙して喜んでいる。しかし大なる世の中はかかる小天地に寝ころんでいるようでは到底動かせない。しかも大に動かさざるべからざる敵が前後左右にある。いやしくも文学を以て生命とするものならば単に美というだけでは満足が出来ない。丁度維新の志士勤王家が困苦をなめたような見にならなくては駄目だろうと思う。間違ったら神経衰弱でも入牢でも何でもする見でなくては文学者になれまいと思う。文学者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かるような小天地ばかりにおればそれぎりだが、大きな世界に出ればただ愉快を得るためだなどとはいうていられぬ。進んで苦痛を求めるためではなくてはなるまいと思う。

君の趣味からいうとオイラン（注）憂い式で、つまり自分のウツクシイと思う事ばかりかいて、それで文学者だと澄ましているようになりはせぬかと思う。現実世界は無論そうはゆかぬ。文学世界もまたそうばかりではゆくまい。かの俳句連、虚子（注）でもこの点においてはまるで別世界の人間である。あんなのばかりが文学者ではつまらない。というて普通の小説家はあの通りである。僕は一面において俳諧的文学（注）に出入すると同時に一面において死ぬか生きるか、命のやりとりをするような維新の志士の如き烈しい精神で文学をやって見たい。それでないと何だか難をすてて易につき劇（注）を厭うて閑に走るいわゆる腰拔文学者のような気がしてならん。

（夏目漱石の書簡による。文章の一部を省略・改変したところがある。）

注1 細君||妻。

注2 吾人||われわれ。

注3 『草枕』||夏目漱石が明治三十九年(一九〇六年)に発表した小説。禅味・俳味に通じる詩趣を湛えた作品。

注4 イブセン||ヘンリック・イブセン(一八二八〜一九〇六)。ノルウェーの劇作家。通例「イブセン」と表記。社会問題を提示するリアリズム劇で知られる。

注5 閑文字||無用の文章。

注6 オイラン憂い式||着飾った花魁(遊女)が憂いに沈んでいるような、美しいものばかりを描いている文学を喩えたもの。

注7 虚子||高浜虚子(一八七四〜一九五九)。俳句雑誌『ホトトギス』を発行した俳人。夏目漱石『吾輩は猫である』はこの雑誌に掲載された。

問 この文章で述べられている夏目漱石の、文学に対する考えについて、どのように考えるか。自分が読んだことのある文学作品の例をあげながら、あなた自身の考えを、六〇〇字以上八〇〇字以内で論述せよ。